

シカゴの落雪

1998年の3月7日から15日にかけて、PCSAの第9回海外研修としてニューヨーク、シカゴ、ロサンゼルスと3都市を巡った。私は15人の団員とともにコーディネーターとして同行した。今回のテーマは、初期のプレキャストコンクリートやカーテンウォールを見て、現在の日本のPCの技術を再確認することであり、ニューヨークではバンナムビルなど初期のPCカーテンウォール、シカゴでは名だたる超高層ビル群、そしてロサンゼルスではシンドラー邸やエニス邸など、プレキャストコンクリートを使った初期の住宅を見学した。またPC工場を見学し、KPFとSOMという二つの大手設計事務所でPCカーテンウォールに関する講演を受け、ディスカッションする機会もあり、アメリカと日本で同じ点や違う点などに思いを馳せることのできた充実したツアーであった。(写真①②)

今回旅行したアメリカでは、ニュース番組を見ると連日エルニーニョの字幕とともに、異常気象による被害が放送されていた。我々がニューヨークからシカゴに移動する前日の3月9日も、シカゴ・オヘア空港が大雪のため閉鎖されていた。新聞は今年暖冬

だったシカゴに「再び冬がやってきた」との見出しでトップニュース扱いである。幸い我々の移動日には雪もやみ、ニューヨーク、シカゴとも晴れ渡って事なきを得たかに思えた。しかし、シカゴでは-7℃という極寒の屋外で、超高層ビル群を歩いて見学するはめになったのである。

建物の見学は、シカゴ建築財団主催のウォーキング・ループ・ツアーに参加した。ループとはシカゴの中心部を取り囲むように走る高架の電車をさし、その内側のダウンタウンエリアのことも「ループ」と呼ぶ。ループにある超高層ビルを、1891年のモノドックビルからシカゴ派の建物、ミースやSOMの設計した超高層、そして現代のヘルムト・ヤーンらの作品までを網羅する2時間ほどの見学コースである。このツアーは3回目の参加となる私にとって、「インランドスチールビルはステンレスのカーテンウォール。でも鉄の会社でスチールは作っているけどステンレスは作っていない」とか言う説明のおちまで憶えているツアーである。

それにしても-7℃は寒い。10分間くらいが屋外で説明を聞く限界であろう。ベテランのガイドが気を使って、たびたび建物のロビーに入り、寒さを避けるコースを選んでくれた。

そこでおもしろいものが見られた。シカゴはWindy Cityと言われるだけあって、強風で有名である。前日の雪はその風とともに横殴りとなり、町の街灯にも雪がまとわりついて周囲に丸まるとこびりついているような状態であった。そんな状況であるから、当然のごとく超高層ビルの外壁にも雪がくっついているのである。窓台の下部にこびりつくのは当然としても、例のミースのデザ



③落下している雪 光っている点が雪



④H鋼の下に成長するつらら



⑤危険区域 歩道が全面通行できないところもたくさんあった



⑥がらりに付いている雪



①ニューヨークのバンナムビル(現メットライフビル)



②LAのエニス邸前での記念写真



⑦イリノイセンター



⑧イリノイセンターの前の危険区域



⑨イリノイセンターの屋根の雪



⑩シアーズタワーから見た雪のシカゴ

インでH鋼が外部に取り付けられたカーテンウォールが多数あるが、この縦のH鋼にも雪が付着しており、この寒さで凍りついている。そしてこの日の晴天。当然建物に日光があたると、その部分から順番に氷が壊れていく。パリソというわれる音までは聞こえないが、100m以上の高さで雪が凍った棒が割れて、だんだん細かく壊れながら落下してくる。ビデオを持ってこなかったことを後悔するほどみごとな落雪風景。よく見ると、H鋼の下部ではつららも成長していた。地上では市の職員らしき人がヘルメットをかぶって黄色いひもで立入禁止区域を設定している。もちろん、日照に合わせて立入禁止区域も移動していく。うろうろと歩いていると、時々「どさっ」という音がして、雪の固まりがすぐ近くに落ちて砕け散る。全くなんて危険な町なんだ。ひさしやがらりなど、いろんなところに危険な雪が付いているのを発見しながらツアーは進んだ。(写真③④⑤⑥)

やがてツアーは、ヤーンの代表作イリノイセンターに到着した。ところが入り口周辺には大きな立入禁止区域があった。ガイドが説明する。「屋根面も外壁面も斜めになっている建物なので、屋根面にたまった雪が一度に雪崩のように落ちてきて危険なんです。」なるほど。アトリウムの中から見上げると、屋根面にまだ雪が残っていた。確かにあれが落下すれば大変なことになる。なんでも市民には「イリノイセンターの雪崩」として有名だとか。(写真⑦⑧⑨⑩)

大変な町だなあとあきれながら歩いていると、私もひとつ直撃を受けてしまった。小さな固まりが肩に当たったのだが、幸い被害は無し。思ったほど痛くなかったので、大きな固まりが落下する所にさえ気をつければ、けがをするようなレベルではないのかもしれないと思った。

今年は東京でも雪が何度も積もった。アトリウムのガラスを割るなどいくつか事故もあつたらしい。東京とシカゴでは気候が違うので、落下する雪の性質なども異なるだろうが、この状況はシカゴだと当たり前のことなのだろうか。

それにしても、シカゴの除雪の早さには驚いた。翌日の工場見学の時には、大雪が

やんでから2日もたっていないのに、上下3車線ずつの高速道路の除雪が終わっていた。なんでも、かつて除雪の対応が遅れたときに市長が首になったとか。

それだけ雪に敏感な町なのに、建物に取り付け雪には無関心なのだろうか。最近の建築は雪が引っかけにくい平滑なデザインのものが多いが、それも単なるデザインの流行であり、特に雪に対して意識が高いとは思えない。

3月12日にはロサンゼルスへ移動した。-7℃の極寒から20℃の陽気の町へである。ロスも異常気象で、この雨の少ない町で、13日の夕方から雨に降られた。大した雨量ではないのだが、道路は一面水浸しになる。道路の排水能力があまり整っていないようだ。そして、市民は傘をさしていない。考えてみれば、殆ど雨が降らない町で、しかも車社会。車から建物までなんとか我慢すれば問題ないのである。傘なんか常備してなくても当然だろう。東京で雪用の靴とかを持たないのと同じである。ようは頻度の問題だなと、考えさせられた。

それにしても頻度の問題なら、シカゴの雪は頻度が低いとはいえないだろう。高層ビルの町で意外な冬の危険な表情を見ることができた。

海外研修は毎年場所を変えて、様々なメンバーが参加して行われている。次回もコーディネーターの予想を超えた、意外な何かを感じられる旅行になればと願っている。

著者プロフィール

清家 剛・せいけつよし

東京大学工学部建築学科助手

1964年 徳島県生まれ

1987年 東京大学工学部建築学科卒業

研究分野は建築構法計画、建築生産

著書

「新・ファサードシステム」(共著)

「カーテンウォールって何だろう」(共著)

「ファサードをつくる」(共著)